古代文字資料館発行『KOTONOHA』62 号（2008 年 1 月）

パスパ文字の書記方向

吉池孝一

一

パスパ文字は概略チベット文字を角ばらせて作った文字と言うことができるが、字形を方形にまとめる点、一音節毎の切れ目はあるが単語など意味の切れ目に対応した分ち書きがない点は漢字の影響とみてよいのであろう。

もっとも、縦に左から右に書き進む点はモンゴル文字の影響である。すなわち、モンゴル人はパスパ文字を作る以前よりウイグル文字に発するモンゴル文字で自分達の言葉を書いていた。パスパ文字作製後は文字をパスパ文字に置き換えて文章を綴ったため、結果としてモンゴル文字より書記の方向を受け継ぐこととなったというわけである。この書記の方向が漢字という文字組織に影響を与え、縦に左から右に向かって書く漢字漢文が現れたということについては『KOTONOHA』60 号で述べた[1]。

これとは逆に、漢字の書記方向の影響を受けたとみられるパスパ文字の資料もあるので次に紹介する。

二

パスパ文字は何語を表記する場合であろうと縦に左から右に向かって書く。これがパスパ文字の文字組織としての規範である。さきに述べたように、この規範はウイグル文字やモンゴル文字から受け継いだものである。しかるに漢語を表記するばあい、右から左に書く例が間々見られる。たとえば、元代の私的な印章すなわち「私印」には次のような例がある。

・印影の左を「gi」（記）、右を「shi」（私）とする。これが右から左に漢語で「私記」と記したものであることは、別に漢字漢語の印に「私記」があることからわかる。

＊パスパ文字印は孫慰祖 2001 の 401 頁、漢字印は同 181 頁による。

・印影の左を「gi」（記）、右を「fuŋ」（封）とする。これが右から左に漢語で「封記」と記したものであることは、別に漢字漢語の印に「封記」があることからわかる。

＊パスパ文字印は孫慰祖 2001 の 409 頁、漢字印は同 153 頁による。

・印影の左を「fuŋ」（封）、右を「gin」（謹）とする。これが右から左に漢語で「謹

1　吉池孝一 2007 参照。ひとつは『蒙古字韻』（校訂者である朱宗文の序年は 1308 年）という書の漢字漢文の序文。いまひとつは「特贈鄭鼎制誥」と称される皇慶元年（1312）の皇帝聖旨を刻した碑文の漢字漢文である。

封」と記したものであることは、別に漢字漢語の印に「謹封」があることからわかる。

＊パスパ文字印は孫慰祖 2001 の 410 頁、漢字印は同 155,190 頁による。

・印影の左を「zeŋ」（祥）、右を「gei」（吉）とする。これが右から左に漢語で「吉祥」と記したものであることは、別に漢字漢語の印に「吉祥」があることからわかる。

＊パスパ文字印は黄惇 1999 の 220 頁、漢字印は孫慰祖 2001 の 216 頁による。

漢字漢文は長い歴史をもっており、普通その使用者にとって、左から右に書くというようなことは思いもよらないことである。いっぽうパスパ文字の場合、これは新しく作られた文字である。したがってその文字組織の持つ規範が、全ての使用者に了解されているわけではないであろう。ここに紹介したような私印において右から左に書き記す例が多く見受けられるのは、これを作り使用する層において規範意識が十分に醸成されていなかったことを示すものである。

以上はパスパ文字漢語の例であるが、僅かながらパスパ文字モンゴル語の例もある。

三

パスパ文字でモンゴル語を表記するばあい、いうまでもなく縦に左から右に書かねばならないが、僅かながら漢字漢文のように右から左に書く例がある。たとえば、中国山西省にある 1303 年の令旨（太子などの命令）を刻した碑文のパスパ文字モンゴル語がある[2]。照那斯図 1991 はこの例につき、石を刻した人物（“刻石人”）がパスパ文字の書記法を理解していなかったためであるとするが[3]、それはどうであろうか。

刻石用の下書きを準備した人物と刻し終わった碑文を確認した人物の了承がなければ、令旨を刻した碑文として後世に残るはずがない。石を刻した人物（“刻石人”）のみの仕業に帰すわけにはいかない。石に刻される前のパスパ文字モンゴル語の令旨原文は左から右に書かれていたはずであるから、刻石用の下書きを準備した時点で右から左に書き換えたのであり、この碑文に関わった人物が意図的に漢字漢文の書記方向に合せたと見るのが自然である。この碑文の場合、主たるパスパ文字の文面の前後に漢字漢文が添え書きされている。このことがパスパ文字の書記方向に影響したとも考えられる。

四

なぜ右から左に書くパスパ文字資料の例があるのか、資料ごとにその理由を考えなければならないのは言うまでもないことである。ただ、元というモンゴルの時代にあって

---

[2] 照那斯図 1991（『八思巴字和蒙古語文献 II 文献彙集』東京 : 東京外国語大学 AA 研）の 132 頁参照。

[3] 照那斯図 1991 の 131 頁には「這説明刻石人不了解八思巴字行款的書寫法。」とある。

は、ソグド系文字（縦に左から右に書き進む）と漢字（縦に右から左に書き進む）との接触によって、書記方向についての規範意識に多少のゆるみが生じたとみてよいのであろう。漢字であれパスパ文字であれ、規範的でない書記方向を持つ文字資料の存在は、そのような時代の風潮の中での出来事としてとらえることができる。

参考文献

黄　惇主編 1999.『中国歴代印風系列　元代印風』,重慶：重慶出版社。

羅常培・蔡美彪 2004.『八思巴字與元代漢語　増訂本』,北京：中国社会科学出版社。初版は 1959 年。

孫慰祖主編 2001.『唐宋元私印押記集存』,上海：上海書店出版社。

照那斯図 1991.『八思巴字和蒙古語文献 Ⅱ文献彙集』,東京：東京外国語大学 AA 研。

吉池孝一 2007.「漢字とソグド系文字」,『KOTONOHA』60 号,pp.16-21。